

氏 名 柘 植 美 波  
学位の種類 博士(文学)  
学位記番号 甲 第67号  
学位授与の日付 2021年3月18日  
学位授与の要件 学位規則第4条第1項 該当  
学位論文題目 **中間構文の形式と意味—分散形態論的視点—**

学位審査委員 主査 教授 森 田 順 也  
副査 教授 高 野 祐 二  
副査 准教授 中 川 美 和

## 論文内容の要旨

英語の中間構文 (middle construction) とは、(1) のような文であり、主要構文の1つとされている。

(1) This book sells well.

(1) の文にある主語名詞句は、他動詞の意味上の目的語で対象物を表すにもかかわらず、動詞は能動態で示されている。表面上では1つの項 (argument) を取り、自動詞用法であるという点で、形式は能格構文 (ergative construction) と類似している。ところが、(1) は「その本はよく売れる」と解釈され、意味においては受動構文 (passive construction) と類似している。(1) のような表現は、能格構文と受動構文の中間的性質を持つということから中間構文と名付けられた。従来の英語学研究においては、主に統語論・意味論の理論研究で取り上げられ、どの部門で派生されるのかということが長年に渡って議論されてきたが、研究者の間でも意見が分かれ、筆者が知る限りでは、はっきりと明らかにされていないように思われる。

中間構文にあまり馴染みのない私たち日本人にとっても、「ベストセラー (best-seller) 作品」というような言葉はよく目にすると思われる。この語の基底文は、(1) の文であると考えられている。従来の研究では、英語の中間構文から best-selling や best-seller のような複合語 (compound) が派生されることはないと仮定しているものもあれば、派生されることができると論じるものもある。ところが、このような複合化は可能であるという研究があるにもかかわらず、当該複合語の派生メカニズムについては明かされていない。

加えて、中間構文はフランス語やイタリア語でも存在し、異言語間の比較研究が行われることもある。実際、日本語にも英語の中間構文に相当するものがあると考えられ、それに該当するのは「この本は簡単に翻訳できる」のような可能文、あるいは「この茶碗はすぐ割れる」のような自発文である。しかし、筆者が知る限りでは、英語と日本語の中間構

文の比較に関する研究はあまり見られない。

上述のように、中間構文あるいは関連表現に関する研究状況を調査すると、長年に渡って取り組まれてきた研究対象の構文ではあるものの、その特性や派生メカニズムについて明かされていないことが多くある。

本論文の目的は、先行研究及び事実観察を通して、中間構文の特性を明らかにした後で、英語の中間構文とその由来の複合語、及び日本語の中間構文を統一的に捉える派生メカニズムを明らかにすることにある。当該構文の特性については、とりわけ形式と意味に焦点を当てる。

第2章の先行分析では、英語の中間構文の典型的なタイプの特性について意味的、統語的、形態的・語彙的、機能的・語用論的に4つに分けて記述的に紹介し、特殊なタイプの中間構文について説明し、当該構文の派生方法を概観した後、日本語の中間構文の特性と派生方法について取り上げる。

まず、英語の中間構文における意味的特性は、大きく6つある (§2.1)。①主語の固有の属性を表す。②総称的な文であり、特定の事象を示せない。③副詞または修飾表現が含まれ、それに関する意味的制限もある。例えば、容易さや事象に関連する副詞は受け入れられるが、精神や動作主の様態を表す副詞は受け入れられない。加えて、法助動詞と関わることもできる。④全ての英語の動詞が中間動詞になれるわけではない。当該構文に関与できる動詞としては、達成動詞、状態変化動詞、場所移動を表す名詞由来転換動詞などがあるが、その一方で、当該構文に関与できない動詞として、状態動詞や破壊動詞、接触・打撃動詞、知覚動詞、創造動詞、与格動詞、受取動詞が挙げられる。⑤動作主が潜在し、不定の行為者が含意される。⑥被影響性の条件が合う場合のみ中間構文が成立する。

当該構文の統語的特性としては、以下の5点が挙げられる (§2.2)。①基底構造が他動詞構造であるため、主語名詞句は他動詞の目的語に相当し、主題を表す。②再分析を受けるが、 $\$$  削除を受けないという統語現象は、当該構文が統語で派生されるということの証拠である。③通常副詞と共起する。④潜在的動作主が含まれるという特徴については、統語的に動作主が潜在するという立場、そして統語的には動作主が不在であるという立場に分かれる。⑤中間動詞に含まれる空形態素により態変換が起こる。

形態的・語彙的特性については、中間構文は複合化できないという考えと複合化できるという考えに二分化されるということ概観する (§2.3)。Keyser and Roeper (1984) は、中間複合語は第一姉妹の法則に違反するため、成立しないと分析している。その一方で García de la Maza (2011) は、中間動詞として現れる頻度が高いものは語彙化プロセスを受け、そこで形成された複合語の意味が特殊化されることもあると論じているが、語彙化プロセスの具体的な方法については明かされていない。

機能的・語用論的特性としては、3点を紹介する (§2.4)。①主に広告文や商品の使用説明書で見られ、官僚言語でも使われる傾向にある。②伝える価値のある情報を提供する必要がある。③当該構文における修飾語の必要性や目的節の付加については統語的要因だけで

なく、語用論的要因も見られる。

中間構文には2種類の特殊タイプがある (§2.5)。1つ目が、擬似中間構文 (pseudo-middles) と呼ばれるもので、主語名詞句が道具や場所を示すという表現である。2つ目が、再帰中間構文 (reflexive middles) で、典型的なタイプで必要とされる副詞表現の代わりに、再帰形が用いられるという表現である。

中間構文の派生方法としては主に3つのアプローチが見られる (§2.6)。第一に統語的アプローチとは、当該構文は受動構文と同様に、基底構造にある目的語が主語位置に移動するという考えであり、Keyser and Roeper (1984) や Kaga (2007) が示している。第二に、Fagan (1988) による語彙的アプローチでは、外項に与えられる意味役割に「誰かが」のような任意の解釈を与え、直接目的語の意味役割を外在化させるという考えである。第三に、項構造を中心とした語彙意味論的アプローチによって中間構文の派生について説明ができる。そのアプローチを採る先行研究が幾つかあり、本稿では Grimshaw (1990), Kageyama (2006), Randall (2010) による分析を概観した後、Oshita (1994) による中間複合語の派生方法を紹介している。項構造に態交替が生じることによって、当該構文は事象ではなく主語名詞の特性を表し、この項構造は統語構造につながる。

日本語にも中間構文がある (§2.7)。日本語の中間構文も英語と同様に、主題を表す主語名詞句の固有の属性を表し、総称的解釈が与えられる。英語との相違点が4つあり、動詞に制限がないという点、音形を持った中間接辞があるという点、形態的な格の吸収が見られるという点、そして受取人が着点になるような動詞と共起できるという点が挙げられる。英語の中間構文は日本語の可能文もしくは自発文のどちらに該当するののかについては、先行分析によっても様々な意見に分かれる。加えて Taguchi (2007) によると、日本語の中間構文は overt syntax で派生され、内項は目的語位置に留まり、統語的移動が起こらない。

第3章では、第2章で紹介した中間構文の特性や派生メカニズムにおける分析が正しいかどうかということを、事実観察を通して検証する。具体的な方法としては、1億語の大規模コーパス British National Corpus (以下、BNC) あるいは英語母語話者によるインフォーマント調査によって収集した例文を提示し、先行分析で明らかにされてきたことが正しいかどうかということを述べる。

3.1節では、意味的特性・統語的特性・語彙的特性の順で、事実観察の結果を論じる。中間構文には意味的特性が非常に多く見られるが、事実観察より、先行分析に合わない特性が見られる (§3.1.1)。まず同表現は、原則として単純現在形であることが特徴の1つであるとされていたが、一見事象を表すような過去時制や進行形という形式であっても、特性解釈を与える表現であれば、中間構文として現れることができる。加えて、先行研究で中間構文に現れない副詞として、動作主に係る副詞が挙げられていたが、実際には現れる場合もあるということ、そして、法助動詞が必ずしも副詞の代わりとして現れるわけではないということを明らかにした。さらに、動詞の2つの意味的制限が必ずしも先行分析のとおりになるとは限らない。第一に、接触・打撃動詞が関与する中間構文および結果述語を伴

う同表現については、先行分析で明らかにされていたことと違う結果を得た。第二に、Fellbaum and Zribi-Hertz (1989) 提案の被影響性と形容詞的過去分詞の条件では、中間構文になれる動詞について十分に予測できない。

統語的特性として問題にしたのは、主語名詞句の意味役割である (§3.1.2)。先行分析の通り、BNC で収集した中間構文の主語名詞句のほとんどが主題を表し、主語位置を占めるため、統語的移動が見られることがわかる。しかし、BNC やインフォーマント調査において、*The hollow-ground blade will cut cleanly* や *These places often fish well after nightfall* のような文も見られ、主語名詞句が道具 (instrument) や場所 (location) という意味役割を持つ場合もある。このような表現は、典型的な特徴からはずれた擬似中間構文に分類されると考えられるが、どのようにして統語的に説明するのかということを考える必要がある。

語彙的特性においては、中間複合語の形成が可能か否かということを検証した (§3.1.3)。BNC で調査したところ、中間複合語が比較的多く見られ、Keyser and Roeper (1984) の分析と反する結果を得た。中間構文由来の-ing 形複合形容詞としては、*best-selling* が非常に多く見られ、その他にも *fast-selling*, *well-paying*, *easy-reading* などが見出される。(1) で示した中間構文はよく使われるため、この文が語彙化プロセスを受け、複合語が派生されたと考えられる。従って、頻繁に現れる中間動詞については語彙化プロセスを受け、複合化ができる、という Garcia de la Maza (2011) の分析は正しいということがわかる。上述の複合形容詞が修飾する名詞は、全て主題の意味役割を持つ。加えて、BNC で *a fast-cutting blade* という例が見られた。この複合形容詞 *fast-cutting* が修飾しているのは、*blade* という道具の意味役割を持つ名詞である。この複合語の基底文は、*The blade cuts fast* のような擬似中間構文だと予測される。複合形容詞の他に、*best-seller* を始め、*million-seller* や *slow-seller* という -er 形複合名詞も見出され、これらも中間構文から派生された複合語である。但し、-er 形複合名詞は、BNC でもなかなか検索できなかったため、成立する複合語は限られているようである。

3.2 節の理論的側面では、統語・語彙・意味・形態という4つのアプローチの代表的な研究を取り上げ、検証している。第一に、Keyser and Roeper (1984) や Kaga (2007) による統語的派生方法では十分に説明できないことがある (§3.2.1)。このアプローチは、受動構文と同様に直接目的語の移動が起こるというものである。ところが、*The hollow-ground blade will cut cleanly* のような文が BNC で見られ、その主語名詞句が、道具や場所を表せるような前置詞句内の名詞句であるという表現が見出された。このような前置詞句の中から名詞句を取り出して移動することは、問題であるように思われる。加えて、Keyser and Roeper (1984) や Kaga (2007) が示した統語的派生方法には、中間構文に必要な副詞表現や潜在的動作主に関する記載がないが、このような表現をどのようにして統語構造に反映させるのかということを考えるべきである。

第二に、Fagan (1988) による語彙的アプローチについては直接問題にしないが、この分析を支持できない点について取り上げる (§3.2.2)。\**easily-bribing* は複合語ではなく、動詞形状

容詞 (*gerundive adjectives*) と呼ばれる、事象を示す統語的な句であり、中間構文は非事象性であることからその環境に合わないため、中間構文から複合語の派生ができない。これは当該構文の派生場所が語彙部門であることの帰結となる、と Fagan (1988) は示している。ところが、事実観察の結果で示したように、中間複合語は存在する。統語的な句であれば、生産的で自由に派生されるはずだが、*best-selling* や *well-paying*, *best-seller* のように複合語にできるものと *\*well-writing* や *\*best-folding*, *\*best-writer* のように複合化できないものがある。このような事実は、中間複合語が不可という証拠により当該構文は語彙部門で派生されるという Fagan (1988) の主張に結びつけることができない。

第三に、意味的アプローチにも問題点が見られる (§3.2.3)。影山 (1998) は接触・打撃動詞が結果述語と共に起ると、受け入れ可能な中間構文になるという事実から、同表現は状態変化を表せるような意味構造を持つと提案している。ところが、接触・打撃動詞が関与する中間構文及びそれに結果述語が含まれる表現について、インフォーマント調査を実施したところ、受け入れ可能なものもあれば、受け入れ不可のものも見られたため、状態変化を表す意味構造では説明ができないと思われる。影山 (1998) の分析と同様に、Randall (2010) が示した中間動詞 *read* の意味構造も、状態変化を表すように考えられているが、その意味構造を解釈すると「心の中に入っていく」となり、やや不自然に思える。

第四に、形態的アプローチも中間複合語について十分に説明できない (§3.2.4)。まず、中間複合語は第一姉妹の法則に従えないため形成されない、と Keyser and Roeper (1984) は主張しているが、上述の事実に紹介したように、当該構文由来の複合語は存在する。加えて、Oshita (1994) は項構造の分析に基づいて中間複合語の形成過程を紹介する際に、*best-selling* のような *-ing* 形複合形容詞についてのみ取り上げ、*best-seller* のような *-er* 形複合名詞については取り上げていなかった。しかし BNC 調査より、複合名詞も実際には見られるため、その形成についても説明できるようなメカニズムを検討する必要があると思われる。さらに、総合複合語の形成に関する代表的な分析である Lieber (1983) の「素性の浸透」と「項連結の原理」を用いて、*best-selling* の語彙構造を筆者は考えたが、Lieber (1983) が示した語彙構造に従うと、当該構文由来の複合語について十分な説明ができない。

以上のように、統語・語彙・意味・形態という 4 つのアプローチに関する代表的な派生方法を、事実観察と照らし合わせて理論的に検証したが、どの方法も中間構文及び同表現由来の複合語に関する派生について十分に説明できないことがわかった。

第 4 章では、第 3 章で明らかにした当該構文の特性を説明し、従来の派生メカニズムの問題点を解消できるような中間構文の生成方法について、分散形態論 (*Distributed Morphology, DM*) を用いて提案する。

4.1 節では、分散形態論について簡潔に紹介する。これは Halle and Marantz (1994) が提唱した枠組みで、従来の語彙部門の機能を、語彙部門である「純粋な語彙部門」 (*Pure Lexicon*)、形態部門 (*Morphology*)、論理形式部門 (*Logical Form, LF*)、音声形式部門 (*Phonetic Form, PF*) という 4 つの部門に分散させ、それぞれの部門で必要な操作が適用されて、語が派生する

という考え方である。この枠組みにおける重要な点が 2 つある。1 つ目は統語後の形態論 (post-syntactic Morphology) であり、音声形式部門の中で、形態的作用が統語的アウトプットへ適用され、語の構造が作られるということである。2 つ目は、後期挿入 (late insertion) であり、「語彙」にある語彙項目を音声形式部門で挿入させるということである。

4.2 節では、英語の中間構文とその由来複合語、そして日本語の中間構文を統一的に説明できるような派生メカニズムについて筆者の提案を示す。まず (1) の基底構造が他動詞構造であることから、sell を含む動詞句  $vP$  には内項に相当する名詞句、副詞句、潜在的動作主に相当する名詞句 PRO が含まれると考える。他動詞構造の動詞 sell は中間接辞 (Middle Suffix) と結合する。中間接辞の作用を受けて、非事象的で特性の解釈を持つという中間構文に必要な特徴が得られる。特性範疇化の一般的性質として、内項の OP は痕跡  $t$  のみを変項として束縛するため痕跡  $t$  を残し、内項の OP は動詞句  $vP$  の指定部に移動し、そこで IP の指定部にある外項とリンクする。このような構造が統語で作られ、音声形式部門に送られ、そこで語彙挿入が起こる。中間接辞は、語彙記載項を持ち、次のような 3 つの情報を規定する。①特性素性と法性素性という内的素性を持つ。②可能の意味を表す。③動詞は動作や状態変化を表す他動詞であり、副詞は様態や程度、結果を表すものである。この情報に合致する動詞や副詞に中間接辞が挿入され、典型的な中間構文ができる。擬似中間構文については、上記の中間接辞の挿入条件を緩和させることにより、逸脱する現象を語彙記載項で統一的に説明できるということを示す。加えて、このメカニズムは日本語の中間構文にも適用できる。そして、分散形態論の枠組みで筆者が提案した中間構文の基底構造は、best-selling や best-seller のような中間複合語の形成についても説明できるということを示す。

第 5 章では、分散形態論的考えを用いて、中間構文の生成メカニズムを説明することができる結論づけている。従来の先行研究では、統語的・語彙的・意味的・形態的アプローチで当該構文の派生メカニズムについて考えられてきたが、1 つの部門に絞って説明することができず、どの部門でも問題点が見られた。中間構文は意味的・統語的・語彙的・語用論的にも様々な特徴が多く見られるため、1 つの部門に絞って特性や派生メカニズムについて説明することが難しい。一方、語の情報を様々な部門に分散させて、適切に処理するという分散形態論的視点であれば、中間構文の特性や派生メカニズムについて統一的に説明できる。本論文で提案した分散形態論的派生メカニズムは、英語の中間構文だけでなく、best-selling や best-seller のような当該構文由来の複合語や日本語の中間構文についても同一方法で生成される、と論じることができる。

## 審査結果の要旨

生成文法理論の重要な課題の 1 つは、統語論と形態論の相互作用の解明である。関連する構文として受動構文、名詞化構文、能格構文などが挙げられるが、中間構文 (middle construction) も関連する重要な構文である。本研究は、統語-形態のインターフェイスの解明を目的として、英語の中間表現および対応する複合語表現の特性を明らかにし、その根源を統一的に説明しようとするものである。

本博士論文は 4 つの章から成る。研究の背景、目的、および構成を述べた第 1 章に続き、第 2 章では先行研究の要点をまとめる。まず、各種の先行研究が指摘する、中間構文の意味的、統語的、および形態・語彙的な基本的特性を整理する。基本特性からはみ出す特性も見られ、これを「擬似中間構文」の特性としてまとめる。次に、中間構文の派生方法についてまとめる。統語的アプローチ、語彙的アプローチ、および語彙意味論的アプローチに分類したうえで、各分析を概観する。最後に、日本語の中間構文の特性と派生方法を紹介する。以上のように、代表的な先行研究を取り上げ、中間構文の諸特徴を整理したうえで、その派生メカニズムへの各種の接近法を簡潔に提示している点は、評価できる。

第 3 章では、1 億語の大規模コーパス (BNC) の検索およびインフォーマントチェックによって事実観察を行い、事実面から先行研究を検証する。主な検証結果は、3 点にまとめられる。第一に、中間構文の基本特性が確認される一方で、特殊な特性も確認される。例えば、「主語の恒常的な性質・状態」を表す基本的中間表現に加えて、主語の一時的状態を示す進行形の中間表現が見られる (p. 67)。また、「動詞を修飾する副詞類のみが中間表現に関与できる」という基本特性に加えて、主語指向の副詞類も関与できるようになる (p. 73)。第二に、中間動詞に関する Fellbaum and Zribi-Hertz の条件を詳細に検証する (pp. 77-86)。その結果、予測が十分に確認されないことが判明し、本条件は不十分なものであると結論づける。第三に、重要な論点の 1 つである、中間構文の複合化の可能性について検証する (pp. 88-91)。BNC 調査によって-ing 形容詞複合語が比較的多く見られ、-er 名詞複合語も見出されることから、中間構文の複合化が可能であることを確認する。次に、以上の事実観察を踏まえて、理論的側面から先行研究を検討する (pp. 91-98)。統語的、語彙的、意味的、および形態的アプローチに分けて、各アプローチの経験的・理論的問題点を指摘する。以上のように、大規模コーパス (BNC) およびインフォーマントチェックを使った詳細な事実観察により、先行研究の見解を確認する一方で、その問題点や新たな事実を明らかにしたことは、当該構文の解明に貢献するものとして評価に値する。

第 4 章では、分散形態論 (Distributed Morphology) の枠組みで、英語の中間構文および中間複合語の特性群を統一的に捉える派生メカニズムを提案し、この仕組みが日本語にも成り立つことを示唆する。具体的には、基底構造に無形の中間接尾辞 (middle suffix) を仮定することにより、基本特性「主語の恒常的属性」および「法的意味 (～である/しやすい) の保有」を導き出し、さらに基底構造の目的語に位置する演算子 (operator) の主語

領域への移動が、「主語は主題役割を担う」という基本特性を生み出す。複合化については、統語的中間構文と共有する中核構造の上に、形容詞形成接尾辞 (adjectivizer) または名詞形成接尾辞 (nominalizer) が付加する統語構造を仮定する。この構造から、合併 (merger) を中心とする一連の形態操作の適用によって中間複合語が加工される。このようにして、統語的および形態的中間構文の共通の基本特性群を、共有する中核構造から統一的に説明できる点は、高い評価に値する。加えて本研究が、分散形態論の視点から当該構文の派生プロセスを定式化した初めての試みである点も、一定の評価に値する。

今後の課題として、以下の 4 点を指摘できる。第一に、可能な中間動詞の制限の精緻化である。すなわち、可能な中間動詞を選り分ける厳密な分類方法を確立すること、および中間動詞の制限を記載項に単に指定することなしに、統語構造から導き出す手法を検討する必要がある。第二に、中間構文の統語論と形態論の平行性をさらに追究するために、複合以外の形態現象と中間構文を関係づけることである。すなわち、接辞付加 (re-read、over-sell) や転換 (to shelve) によって派生された動詞の中間構文への関与について、調査する必要がある。第三に本論文は、典型的な中間構文と特殊な属性を含む「擬似中間構文」を区別するが、両者はどのように関係づけられるのかを示すことが肝要である。例えば主語が道具役割を担う場合、演算子の目的語位置から主語領域への移動を仮定するのか、あるいは別の方法を取るのか検討を要する。最後に、中間構文と関連構文—能格構文、tough 構文などを比較・検討することである。これらの構文間の共通点と相違点を浮き彫りにし、これを説明することが最重要課題として残されている。

以上のように、今後の課題は残るものの、中間構文の詳細な事実観察に基づいて先行研究の明快な批判的議論を行っていること、および最新の言語理論の枠組みで独自の分析を提案していることを評価して、本学位審査委員会は、本論文が合格点に達しており、博士の学位を授与する資格があると判断した。